

市内においては、その大型店出店がほとんど藤沢駅周辺であったので、他の商業中心地である辻堂・長後を大きくひきはなすのだが、その藤沢駅周辺を中心に、昨今の商業発展を、市の調査、商店街・大型店の方々のお話にもとづいて、より詳しくほりさげてみた。

大型店出店は、昭和40年前半の大きな人口増加に比して、藤沢市の商業力は相対的に低く、大型店にとって魅力ある場所であったためなされたものであるが、その実現には市の都市計画事業（南口土地区画整理事業、再開発事業）や法律規制（防災街区造成法、都市再開発法、大規模店舗法）が大きな誘因として働いている。ともあれ、昭和48～49年にかけて、商圈人口の増大、流出客の吸収をみこんで、7店の大型店が新造成・ないしは増築を行なった。

しかし、これほど多くの大型店ができたわりには、藤沢市の商業力・中心性は伸びなかった。確かに、藤沢市年間販売額はふえたが、予想を下回るもので、販売効率の低下をまねき、大型店過剰といわれた。商圈も、新興の厚木市・大和市などにおされて、それほど大きくならなかったし、東京・横浜へ買物に出る割合（流出率）もだいたいへったものの、呉服・神士服などでは、東京・横浜への流出率は依然として約25%である。これは、藤沢市大型店のファッション性に信頼がおかれていなく、2流デパートとみられているからである。一方、商店街も、南口本通り、ファミリー通りの様に大型店と共存をはかり、盛んになったのは一部で、大部分の商店街は、昔ながらの商店街であり、藤沢市商業の発展の足をひっぱっているといえる。

この様な実態は、大型店・商店街とも自覚しているものである。大型店は、各店の特色をだす事によって、顧客の獲得に懸命であるが、一般に売り上げは不振で、昭和53年になって西友ストアー、志沢が閉店した。

同時に、53年秋には、藤沢西武、藤沢サイカ屋が、今までの大型店の欠点を直して、高級な品揃え、都会的な雰囲気でもって、売り込みに加わった。しかし、この2店は、高級都心百貨店としては物足りない面もあり、横浜に近いだけに、京浜への流出客を吸収し、湘南の中心的商業都市になるのはむしろかしいと思われる。

## 中国山地過疎村の地理学的考察

森 山 美知子

第2次世界大戦が終末を迎えて、わずか10年余で日本は急速な経済成長の道を歩み始めた。東京や大阪などの都会が、日本の経済成長のシンボルの如く、多数の人間がそのような都会に集まっていった。しかし、その反面、地方の農山村では人口減少の道をたどる地域も増加していった。この現象は村自体の活気を失わせ、人間生活に必要な機能を消滅させるところも出てきた。私の住む岡山県の北部にある中国山地の山村も例外ではなく、地方新聞にとりあげられることもしばしばあった。

このようなことから、中国山地という僻地に存在する村では、過疎化がかなり進んでいるだろうというイメージが私の頭の中にあった。そのようなとき、岡山県の最北端に位置する、まさに中国山地の村である上斎原村を訪れたのである。時はスキーシーズンであり、多数のスキー客で賑わい、民宿

の人々が忙しく働いている様子を見て、なんと活気に満ちているのだらうと思った。しかし、上斎原村はこのような活気をみせ、山奥の村にしては公共施設が整っているにも関わらず、過疎地域に指定されていたのである。ここにおいて、私の「過疎」に対するイメージは完全に覆され、一体「過疎」とは何かという疑問が湧いてきたのである。そこで、上斎原村が過疎問題をどのように受けとめ、そして、地域の特性を生かしながら過疎に対してどのような対策をたててきたのか、さらに、将来性をもった対策としてはどのようなものがあるのかを考察してみた。

一口に言えば、上斎原村の人口変化は、高度経済成長の影響よりも、人形峠のウラン鉱山の事業所の存在に大きく左右されてきた。1955～1960年にかけての人口増加、1965～1970年にかけての23.9%という人口減少も、事業所の影響によるものである。1970年以後の調査でも人口減少を続け、林業、畜産などの地域産業の充実が図られており、何十年か先には、大きな発展がみられるであろうと予想されている。そして、ここ数年来、人口は安定しており、わずかの増加もみられる。この人口の安定は観光開発、人形峠原子力産業株式会社の設立によるものである。村民の自主的な開発から始まったスキー場開発は、当村が奥津観光レクリエーション地区に指定され、県の補助を受けて恩原スキー場が開発されたことで、その頂点に達し、過疎防止の大きな要因となってきた。しかし、昔からのスキー場は設備が不十分ということで衰退の傾向にある。また、スキー場は年々の気候条件に左右されることが多い。このようなことから、観光産業の不安定性が指摘できる。

これに比べ、「人形峠」という上斎原村の特色の上に設立された原子力産業株式会社は経営の安定性からみて、今後の過疎の歯止めとなることが予想される。実際、この会社の設立にあたって都会からのUターン者を多数迎えることができた。

上斎原村は過疎防止に成功してきた村であるといえるが、スキー場の開発及び「人形峠」という上斎原村ならではの特色が成功の大きな要因となっているといえる。地域産業を発展させることも、長い目でみれば大いに必要なことであるが、過疎を早急に防ぐには、その他の対策も必要である。地域の特色を最大限に生かして過疎対策をたてることができた上斎原村は幸運であったといえる。

## 三宅島の自然環境における植林の意義

山 田 真 紀 子

### (1)研究の目的

活火山島という特殊な自然環境において、低い土壌の生産性を高める上で、三宅島では植林の果たす役割が大きいと考えた。そこで島内のある地域を選んで、実際に植林が年代的に新しい火山砂礫堆積物に及ぼす影響について、土壌学的方法で分析し、明らかにした上で、三宅島における植林の意義について考察しようとした。

### (2)研究の枠組

まず、文献調査で三宅島の概観をとらえたのち、自然環境について詳しく調べ、さらに現地聞き取り、資料によって三宅島の土地利用状況を、伊豆諸島の中の大島・八丈島と比較し、三宅島の植林につい